

## 労働歌・どんつき節の変遷からみる築堤工法の土木史

A Study on the relation between Dontsuki Songs, or one of labor songs and embankment method.

房前 和朋\* 竹林 征三\*\*

By Kazutomo FUSAMAE, Seizou TAKEBAYASHI

(概要) 機械施工が開発される以前、土木事業は地域住民の労働力によってなされてきた。その様子は当時の労働者の喜怒哀楽がこめられた「労働歌」からもうかがいすることができる。本論文では特に、築堤における最も基本的かつ重要な工法である締め固め工法の歴史について、労働歌(どんつき節)に着目して述べる。

単純でつらい共同作業を行う上で、「労働歌」は必要不可欠なものである。初期の土木工事では足踏みによる敷き固めであったものが、施工性を向上させるため道具を用いるようになった。棒を用いる千本搗、杵を用いる杵搗、石や木の切株を使う蛸搗、胴蛸、胴搗、等である。重量の大きなもので締め固めを行うことによって、強固で一度に厚く施工できる。多くの人間がタイミングを合わせる必要が生じるため、労働歌もそれに合わせ変化してきた。このような締め固め工法と労働歌の関係は、機械施工が導入されるまで続いた。機械施工は労働から住民を開放したが、この事は同時に労働歌の最も大きな存在理由を失わせるものだった。現在多くの労働歌が姿を消したが、「淡海節」や「花笠音頭」のようにそのあり方を変質させて、いまなお多くの人に親しまれている歌もある。このことより土木技術の発達が住民に与えた影響は非常に大きかったことが分る。現在の労働歌の存在意義は、先人の苦勞を忘れぬため、また地域の文化を伝えていくことだろう。

### 1. はじめに

日本では古代から農地の開発や洪水から人命・財産を守るため、土木事業が行われてきた。現在では土木事業は様々な工作機械やコンクリート等の優れた材料を駆使して行われている。しかし、このような近代的な施工が行うことが可能になったのは日本における土木の歴史から考えるとごく最近でしかない。この僅かな期間を除いて、主に人力による施工が行われてきた。土木作業は現在でも決して楽な作業とは言えない。ましてほとんどの作業を人力で行うということが非常に大変な作業であることは容易

に推測されるだろう。

このようにきつく、単調で、力を合わせる必要のある共同作業を行うには、作業歌が必要である。

竹林\*\*によると、土木作業に関連する作業唄は以下のように分類される。<sup>1)</sup>

#### ①築堤に関わる作業歌

地搗歌、土搗歌、千本搗歌、粘土節、亀の子搗歌、等

#### ②木石運搬に関わる作業歌

木遣歌、石曳歌、鐘引歌、等

#### ③杭打ちに関わる作業歌

掛矢歌、杭打歌、等

#### ④埋め立てに関する作業歌

新地節、等

これらの多くは「ヤートコセ」等の囃子の木遣節やお伊勢参りと共に全国に広がった里謡「伊勢音頭」

\* 正会員 建設省土木研究所環境部河川環境研究室

\*\* 正会員 建設省土木研究所環境部部長

Keyword 労働歌、築堤工法

が原調となっている。

参考に、「伊勢音頭」を以下にします。

伊勢はナーア津でもつ 津は伊勢でもつ  
尾張名古屋はヤンレ城でもつ  
ヤッコラ ヤートコセ  
ヨイナヤ アリヤリヤ  
コレワイナ コノヨイトコヤー  
伊勢へは7度 熊野へ3度  
愛宕さまには 月参り  
伊勢へ伊勢へと 萱の穂もなびく  
伊勢へは萱茸 こけら茸  
わしが国さは お伊勢が遠い  
お伊勢恋しや 参りたや  
お伊勢よいとこ 菜の花つづき  
歌もなつかし 伊勢音頭  
帯に短し たすきに長し  
お伊勢参りの笠の紐  
馬は豆好き 馬子酒好き  
乗せたお客は 歌が好き  
お伊勢音頭に 心が浮いた  
わしが踊るか 輪の中で

このように、土木作業には多くの種類の労働歌が存在するが、本論文では特に土木工事の最も基本的な工法である「締め固め工法」の変遷を労働歌から述べるものとする。

## 2. 古代の締め固め工法

わが国の締め固め工の歴史は古く、古代から行われてきた。日本最古のダム形式の溜池といわれる「狭山池」(大阪府狭山市池尻地先)では、6世紀に築堤された堤体に敷葉工法という締め固め工法が使用されている。<sup>2)</sup>敷葉工法とは足踏みによる締め固め工法の一つである。マサ土等を築堤材料に使用すれば通常の締め固めで十分施工できる。しかし粘土質の土壌はそのままでは足で踏み固めにくいいため、葉のついた枝を水平に敷きつめて踏み固める。もしマサ土等の堤体材料が豊富に得られていたならば、敷葉工法は行われなかったろう。敷葉工法が行われたため、古代の築堤工事の様子を知ることができる。

<sup>2)</sup>



写真-1 敷葉工法によってつくられた断面

敷葉に使われた木材の炭素14の半減期により築堤年代の推定が可能となった。また堤体増改築等の荷重による圧密を考慮すれば、敷葉と敷葉の距離によって1回にどのくらい締め固めたかを推測することも可能だろう。

この敷葉工法が行われた堤体は「狭山池堤体保存事業」(大阪府)によって保存が行われている。

この工法とともに労働歌が歌われていた記録は残念ながら残されてない。しかし、葉や枝を敷く以外は通常の足踏みによる締め固めと同じであるため、足踏みとによる締め固めと同じく労働歌が必要であろうと思われる。

## 3. 現存する築堤労働歌と締め固め工法

現在残っている築堤労働歌の中で最も古いものの1つに「大野手やんざ節(地搦歌)」がある<sup>3)</sup>。これは現在の香川県小豆島の銚子溪にある蛙子池の築堤労働歌である。瀬戸内海はもともと雨が少なくまた島では川らしい川が少ないため、降った雨がすぐに海へ流れ出てしまう。このため農家の人々は、常に水不足に悩まされてきた。これを救うために300余年前に当時の庄屋、太田伊左衛門が築造したのが蛙子池である。この蛙子池築堤工事は非常に難工事であり、最後には伊左衛門が私財をすっかり売却してようやく完成させたという。「大野手やんざ節」はこの難工事であった蛙子池の堰堤のコア締め固めの時に歌われたのが始まりである。

死後伊左衛門は豊水分霊(とよみくまれ)神として豊岡八幡神社に祭られ、毎年農村歌舞伎が奉納さ

れている。

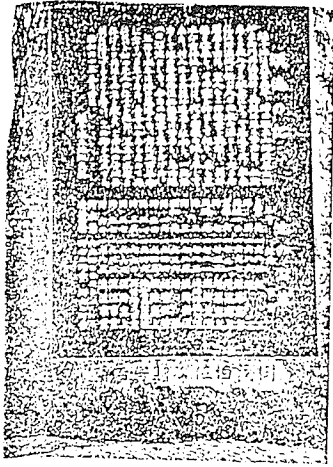


写真-2 蛙子池の太田伊左衛門の碑文  
このことから住民がいかに喜んだか解る。蛙子池築造が真に住民の生活を支える事業だったからこそ、その労働歌が300余年という長い間、代々村人達に歌い続けられたのだろう。

「大野手やんざ節」の大野手とは小豆島の産土神として伝法川上流銚子近くで祭られている大野手姫命と関係があると思われる。また、「やんざ」とは土台という意味である。蛙子池土地改良区佐伯舜理事の話によると、かつてこの地方では、堰堤工事は流域の農家の人たちが総出で行っていた。女の人には絁着物に手甲脚絆といった作業着で縦横に行列を作り、「大野手やんざ節」に合わせて一斉に槌を振り上げ降り降ろしてつき固めたという。昭和20年頃の嵩上げ工事や南海地震等による修復工事等々でもこの地搗歌に合わせて盛土が行われたことを鮮明に覚えておられるとのことである。郷土の貴重な文化遺産である「大野手やんざ節」は平成5年度に蛙子池土地改良区の方々により数多く残されている歌詞が整理され、録音テープ化された。

以下にテープ化された歌詞の一部を示す。  
囃し(歌詞毎にくりかえし)

イヨエーガヒョウタンジャ、ヤンザイ

1. うれし目出度の 若松さまよ  
枝も栄える 葉もしげる

2. ここの座敷は めでたい座敷  
鶴と亀とが 舞遊ぶ
3. 池の名物 荷物にやならん  
聞いておかえり やんざ節

これに続いて27番までの歌詞が録音されている。

#### 4. 千本搗・土羽ふみ歌と淀川

古代から淀川はしばしば洪水に襲われていた。近代では明治18年の洪水を契機として本格的な堤防工事が開始された。沿岸の農家の人々は労働者として河川工事に参加し、主に男はトロッコ押し、女は千本搗等の作業を受け持った。このとき使用された締め固め工が千本搗<sup>9)</sup>であり、当然千本搗歌が歌われた。千本搗とは、堰堤の上に20名余の女性が手拭を被り2列または3列の縦隊で並び、「千本搗歌」に合わせて両手で杵を上下して土をつき固め、さらに両足で交互に踏み固める締め固め工法である。千本搗歌は女性が音頭をとり歌われていた。

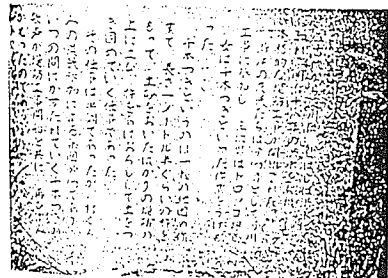


写真-3、4 淀川左岸・千本搗歌碑  
またその他にも「淀川堤土羽ふみ歌」という築堤

労働歌が歌われた。これも千本搦歌と同じような地搦歌であるが、千本つきの作業が終わったあと、土羽と呼ばれる堤防斜面の部分を数十人の女性が並んで踏み固めた時、女性ばかりで歌われた力強い作業歌である。淀川右岸に「土羽つき歌」として次のようなものが伝えられている。

心中しましよか エーヨホホイ  
玉川の川でよ しなぬ心中が エーヨホホイ  
してみたい してみたい  
ア エッサエッサ エッサッサー  
西で庄屋さん エーヨホホイ  
東で加賀屋よ 中の生徳寺の エーヨホホイ  
糸桜糸桜  
ア エッサエッサ エッサッサー  
ついておいでや エーヨホホイ  
この堤燈にエー けして苦勞は エーヨホホイ  
させやせぬさせやせぬ  
ア エッサエッサ エッサッサー

## 5. 釜無川改修と粘土節

明治14・15・19年の出水で釜無川の堤防は各地で決壊した。内務省は釜無川の堤防改修の緊要性を認め、明治20年から直轄工事として堤防大改修工事にとりかかった。それは竜王村から市川大門に至る間の約10kmの大築堤工事であった。

この築堤工事の作業人夫は、ほとんどが地元の村々へ一家から一人ずつ割り当てられた義務人足であった。工事は竜王村の赤坂や今諏訪村から粘土を運搬して土盛り締め固めてつき固めるものであった。

ここでは「粘土打ち」といわれる工法が用いられた<sup>7)</sup>。「粘土打ち」とは、運搬された土を女性や老人が餅つきの杵のような杵で粘土を打ち固め、最後は厚い板に柄を付けた平打ちと称するもので土手の斜面を打ち固めるものである。

明治20年頃を境にして土砂の運搬法はモッコでの継ぎ担ぎからトロッコによる運搬に変わった。しかし、粘土打ちは相変わらず杵と平打ちによる方法であった。この単調な仕事の繰り返いを紛らわすものとして田の草取り歌や盆歌が歌われるようになり、それらの中から杵や平打ちと調子が合うような文句と節まわしの粘土節が生まれてきた。

この釜無川改修では、特に優れた歌い手が存在した。彼女は児島たかといひ「お高やん」と呼ばれていた。お高やんは旧小井川村山之神から義務人足の一人として、土手普請に参加し粘土節を歌った。彼女は明治3年生まれだということから土手普請に出た頃は18歳であった。お高やんの美声で歌う粘土節は、あまく、つやっぽく、そして粘土打ち作業とよく調子が合った。

彼女の死後ちょうど半世紀たった昭和57年に、粘土節は町の重要文化財に指定された。これを期に釜無川のほとりに「粘土節保存之碑」が建立された。

表には「行ってごらんよ釜無土手へ 粘土お高やんの日よけ松」の一文が刻まれている。また裏には、次のような文が刻まれている。

粘土節は本県中巨摩郡地方の釜無川堤防工事に従事した男女の間に歌い継がれた作業歌です。今をさかのぼること440年天文11年(1542年)当時の甲斐の国主武田信玄公が釜無川の洪水にそなえて築堤工事を起こし以来今日まで歌い継がれてまいりました。

「相傳ふ・・・後奈良天皇の天文10年信玄甲斐の国主となりしが同11年釜無川大洪水あり、甲州一円泥沙の海となる。田圃の被害人畜の損傷算えるに堪えず」〔昭和3年中巨摩群郡誌原文のまま〕以来明治まで釜無は不幸にして繰り返し氾濫し特に明治18年の大氾濫は田富町は勿論のこと盆地一円を泥沙の海と化したといわれています。そして大氾濫を期して時の政府は明治20年堤防の大改修を命じ老若男女地域住民が出勤し粘土をもり杵と平打ちを使い日夜その作業に精根を傾け7年の歳月と汗と脂の結晶で今日ある立派な堤防を築堤されました。そしてその仕事の励みとして人々に声を合わせてその昔から歌い継がれた粘土節をうたい杵をそろえて粘土をつき仕事に汗を流したといわれています。当時その歌声も杵を打ちおろす姿もひとときわ美しかったのは当田富町山之神のお高女でありました。人々は苦しい毎日の仕事の励みとして、お高女の美貌と美声から生まれる歌に合わせて築堤工事に励み苦役に堪えたといわれています。そして昭和7年8月お高女は今日の田富町の礎となられ、田富町布施、妙泉寺境内に永遠の眠りにつかれました。享年63歳でした。

それ以来今日まで粘土節は広く町民に歌い継がれています。思えば歴史なくして現在はありません。先人の偉業なくして今日はありません。清流つきぬ釜無川を見るにつけ、山梨の歴史を守り田富町の繁栄を生んだ先人達を偲び粘土節を田富町の町民としてひとりひとりの心の中に永遠にともしていきたいと思います。

時あたかも昭和56年(1981年)3月、町の無形文化財の指定を受けたのを契機として粘土節を後世に伝承すべく町内外の多くの皆様のご協力をいただく中で粘土節保存会員56名を中心とし、ここに石碑建立のはこびとなりました。

以下 会員名簿 56名刻名

この石碑に刻まれている一文から労働歌がいかに築堤工事において重要であったかが解る。

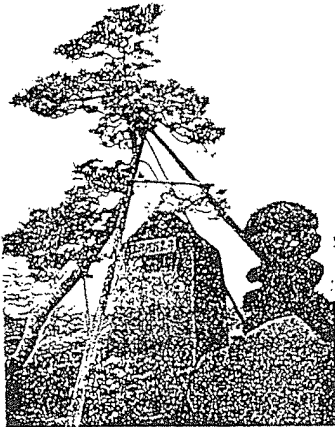


写真-5・6 粘土節保存之碑

## 6. 鹿児島五石橋(西田橋)とどんじ節

現在、甲突川改修に関連して、移設か現地保存かで激しい住民運動が起きている五石橋の現在(平成7年4月)唯一現地に残っている西田橋にもその名を冠した労働歌が残されている<sup>8)</sup>。この歌が「西田橋どんじ節」である。名前から考えると橋梁の歌の様な感じがするが、「どんじ」とは胴突き、土突きのなまったものと言われている。西田橋は約300年前に肥後の名石工岩永三五郎によって作られた。よってこの歌の成立も同じ時期だろう。この岩永氏は橋や城、海岸岸壁等をつくっており、相当に広く高度な技術をもっていたものと考えられる。甲突川についても総合的な治水事業の一環として石橋を作ったものと言われている。よって西田橋どんじ節も、西田橋を含めた築堤等に歌われた歌であると思われる。鹿児島県には他にも多くのどんじ節が残されている。

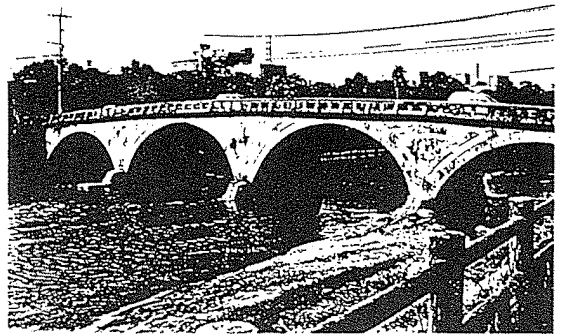


写真-7 西田橋

「どんじ」による締め固め作業は、地つきやぐらを中心に円形にならび、どんじ(地つきの大槌)をあげる綱をもって、音頭とりとはやし組が交互に歌いながら地面を締め固める。音頭とりは即興で面白い歌詞を歌うので、家を建てるときなどには有名な音頭とりに決まるとその歌を聞くために隣村からも参加希望者がでるほどだったという。新築等のめでたい工事では三味がはいり踊りが付いた。「地を固める」という意味を広くとり、結婚式でも歌われたようだ。このような工法はしだいに行われなくなったので、より娯楽的要素が強くなり、現在では後に

述べる花笠音頭のように伝統芸能化されている。

## 7. 千本搦と淡海節

琵琶湖の唯一の流出河川が瀬田川である。したがって、琵琶湖沿岸の浸水対策はこの瀬田川の疎通能力を拡大することであり、古来より瀬田川改修は治水の要だった。近年の改修では、内務省時代の重点工事の明治26年に行われた瀬田川瀬ざらえ工事、および明治33年から明治43年までの淀川改修工事、明治34年から足掛け5年かかった旧南郷洗堰等があり、これらはすべて一環として行われてきた。

この一連の瀬田川改修の築堤工事で使用されたのが千本搦<sup>9)</sup>である。千本搦というのは締め固め工法の一つで、長さ1メートル半ぐらいの杵をもって、土砂をおいたばかりの堤防の上に並び、杵をあげおろして土をつき固めていく工法である。これは単調な作業であるが、千本搦歌に合わせて杵をふるることによりその単調さを忘れることができる。千本搦歌は、歌好きの地元の娘たちが歌って音頭をとっていたが、そのうちに音頭取りを専門にするものまで現れてきた。桜川国丸は音頭取り専門で雇われ一日中千本搦歌を歌い続けた。この国丸が、その後京都で喜劇役者として大活躍し「江州音頭」や「淡海節」を歌い、全国に流行させた志賀廻家淡海その人である。

## 8. 土搦歌と花笠音頭

山形県を代表する歌として有名になった花笠音頭と花笠踊りは今や国内はもとより世界的にも日本を代表する民謡として「フラワーハット・ダンス」の名で知られるようになった。この徳良湖構造時の「土搦歌」が花笠音頭の元歌となったという。<sup>10)</sup>

徳良湖構造時、工事人夫が即興的に歌ったものと関係者が工夫をこらして作詞したもの、それにもともと他から人夫が持ち込んだものが混合して歌われていたことは前述したところである。

ところで、工事最盛期に県庁から高官が現地監査視察に来ることになり、土搦歌を披露して歓迎することとなったが、衆議の結果、やはり卑猥な歌詞は問題があり、差し控えるか、それともうまく手を加え修正するかということになったという。

元歌のなかで優れたものや手を加えられて品が良

くなったものが花笠音頭になったという。

「花の山形、紅葉の天童、雪を眺むる尾花沢」という歌詞は、土搦歌にはなく、後の花笠音頭と呼ばれるようになってからのものだという。歌詞の方は途中いろいろな修正が加わってきているが、節廻しは大正8年徳良湖着工の時の

「土搦歌」と現在の花笠音頭とは全く同じで変わっていないとのことである。ところで、花笠踊りはいつから踊られたのであろうか。大正8年の徳良ダム徳良湖築造工事着工当初から現在の花笠音頭と同じ節廻しで「土搦歌」が歌われていたが、踊りはなかったという。工事が本格化した半年から1年後ではないかという。工事現場の作業人夫の持ち物で全員が持っていたのが笠であったという。好天時には日除けの役目、雨天には雨除けの役目をはたすのが笠である。この笠をつかつての踊りが発生した。土搦作業が交代制でどんつき歌に合わせて笠を廻して仲間へ風を送ってやると労をねぎらう応援団のしぐさとしてはしまったものだという。

大正10年7月27日、徳良湖竣工式の祝として、この「笠踊り」が披露された。山形県に江戸中期より伝承してきた真紅な「紅紙神花」が笠につけられ、百余人の男女が行列でどんつき歌に合わせて笠を廻しながら踊られた。振付けは八木節にヒントを得たものだという。娯楽の少ない当時この初めての「花笠踊り」は、沿道の観客を完全に魅了し、絶賛を浴びた。徳良ダムの竣工式の日が、今や世界的に知られる日本を代表する「花笠踊り」の誕生の記念の日となった。

## 9. 近代工法の発達と労働歌の変質

このように締め固め工法と労働歌の関係だけでも、土木作業と労働歌の結び付きがいかに強いかが解る。図-1に労働歌とともに使用された締め固め工法を示す。この一身体とも言うべき関係は、近代工法の発展によって変質せざるを得なかった。

従来の工法は、昭和30年ごろまで使用されていた。<sup>11)</sup>しかし、締め固めにローラが使用されるようになり従来の工法が使用されなくなると当然労働歌も歌われなくなった。昭和30年代に千本搦に代わるものとしてローラに棒を付けたタンピングローラが開発され、昭和40年代後半になると振動ローラ、

タイヤローラが開発された。表に昭和30～40年にかけてのダムに使用された締め固め工法を示す。

このように、従来の工法は昭和30年代に急速に衰退して行った。

現在では昔そのままの形での労働歌は残されていないが、それは社会が大きく変化した今日ではやむを得ないものである。労働歌とは住民が苦しい作業をなんとかやっていくため生み出された手段であり、住民がその苦しい労働から解放されて時点でその役割の多くを失ってしまった。

しかし「花笠音頭」、「淡海節」、「どんつき節」のようにそのあり方を変化させ、現代でも歌われているものや、昔の土木作業や生活を伝える貴重な文化財として保存されているものもある。

地域の文化を受け継ぎ、先人の苦勞を忘れぬため今後も労働歌の継承が重要である。

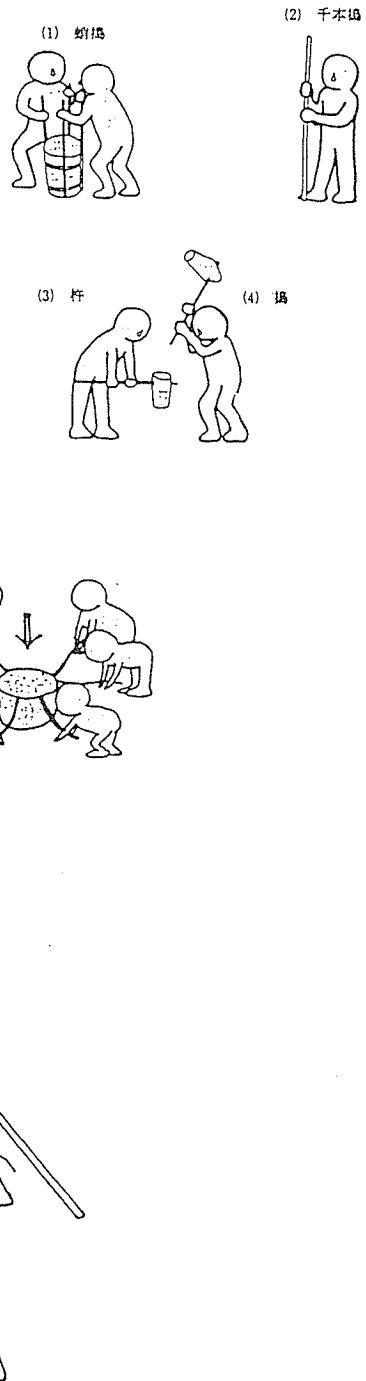


図-1 労働歌とともに使用された締め固め工法（積算技術、建設技術今昔物語、1993.10より）

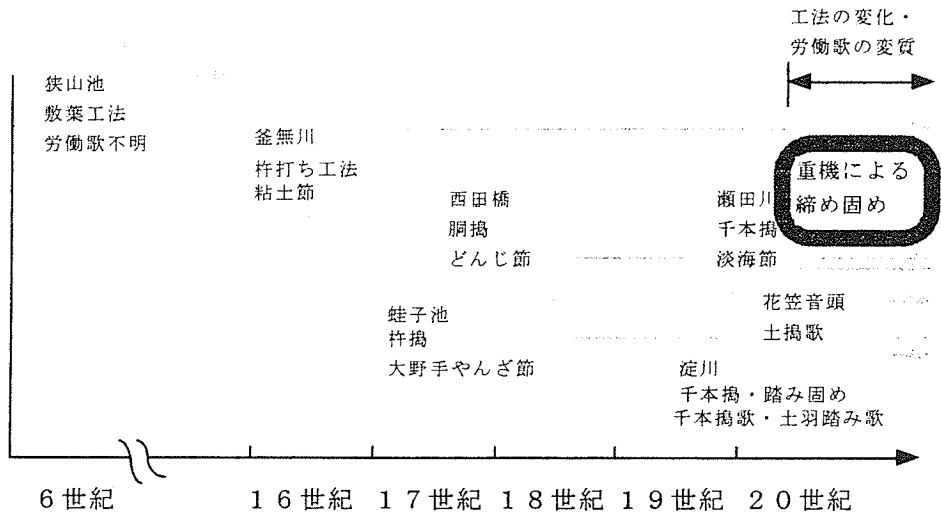


図-2 工法と労働歌

参考資料

- 1、5、6、7、10) ダム・ダム湖名称考XXX  
竹林 征三
- 2) 堤体断面が語る狭山池の歴史-狭山池の改修史  
を示す堤体断面現地見学会資料- 大阪府教育委員  
会・大阪府土木部 1995.1.25
- 3) 狭山池堤体保存事業パンフレット 大阪府
- 4) 狭山池が語る歴史パンフレット 大阪府
- 8) わたしと五石橋 朝日新聞(地方版) 原口泉  
1994.11.10
- 9) フィルダム盛立技術の今昔 竹林 征三 積算  
技術 1993.10
- 11) 田豊町粘土節保存会創立10周年記念誌 19  
91.2
- 12) 徳良湖と花笠音頭 星川茂平治 1981.3
- 13) 伝法川水系治水水利水史 蛙子池築造300年  
記念 蛙子池土地改良区 1985.5
- 14) 肥土山農村歌舞伎保存会長 三木寿氏所蔵資  
料